

育の関係、ジェイムズ・レイモ プリンストン大学教授が韓国超低出生力の特徴について、第二部は筆者が「人口転換点の革新的なアプローチの必要性」というタイトルで日本における人口動向と政策対応について、チョ・ヨンテ（曹永台）ソウル国立大学教授が韓国の人口動向、特に人口密度との関係について講演した。それぞれの部は、パネルディスカッションに続いたが、特に第二部では、イ・スンヨン韓国人口学会会長が、韓国の出生力水準は日本の半分程度であり、特に有配偶出生率の激しい低下は、母親になることの価値が正当に評価されていないことによるものだと力説した。時間切れで十分な議論はできなかったが、今後も日韓人口動向に関し継続的な対話が必要であろう。

（林 玲子 記）

ドイツ連邦人口研究所（BiB）50周年記念国際会議

2023年7月3日（月）から6日（木）にかけて、ドイツ・ウィースバーデンにてドイツ連邦人口研究所の50周年、ドイツ統計局の75周年を記念する国際会議および式典が開催された。ドイツ連邦人口研究所（BiB: Bundesinstitut für Bevölkerungsforschung）は、1973年に内務省令により創設された、ドイツにおける人口動向の科学的研究と政策提言を目的とした政府内の人口研究機関である。今回の50周年記念会議は、「政策に関連する人口研究の最前線」と題し家族・結婚、国内・国際人口移動、死亡動向と長寿化の三分野に分かれ、3日間かけて報告・議論が行われた。筆者は死亡動向と長寿化のセッションで「日本の死因統計とICD-11時代の方向性」と題する報告を行った。マックスプランク人口研究所やフランス国立人口研究所（INED）などヨーロッパ内の多くの研究者が参加するとともに、ドイツの地方統計局の担当者等の参加もあり、活発な議論が行われ、有意義であった。

会場は、BiB 横の博物館、及びそこから1km程度離れたドイツ統計局にて行われ、徒歩で移動しながら街並みを楽しんだ。またドイツ統計局内には人と荷物を運ぶための扉のないエレベーターがあり、古い設備ではあるが現役で始終動いていた。

後半にはドイツ統計局の75周年式典が開催され、すべてドイツ語ではあったものの、基調講演はケースティン・ブルックヴェ（Kerstin Brückweh）ベルリン応用科学大学教授による第二次世界大戦後、特に東ドイツにおける統計制度の歴史に関わるもので、このような研究の厚みがあることも認識できた。

（林 玲子 記）